

学習における当事者性を育むには

The Development of Students' Independence in Learning Environments

武田 富美子

TAKEDA, Fumiko

意欲こそが学習の要

学校教育演習⁽¹⁾という科目で、学生たちがグループを組み、自分たちの取り上げたいテーマを選び、それをみんなで考える授業をしている。この授業を通して毎年痛感するのは、学生は学生同士からより学ぶということである。

2013年12月、あるグループの学生たちが、自分たちの実施する授業テーマに、沖縄の米軍基地問題を特定秘密保護法とともに取り上げた。このグループは、最初は「大阪の教育」をテーマにするつもりだったが、グループの話し合いの中で二転三転し、沖縄の基地問題に行きついた。その最中に特定秘密保護法が多数を力に国会で成立してしまう。そこで急遽、この問題も追加した。

グループの中にも相反する意見があり、沖縄の米軍基地と特定秘密保護法について、賛成・反対両方の立場から資料が出された。むしろ賛成に偏った観もあり、授業をふりかえったときに他の学生から「誘導ではないか」という意見も聞かれた。短時間に二つの問題を取り上げることに無理があった。授業の進め方としては、決して上手だったとは言えない。

しかし、この授業で明らかになったのは、多くの学生の無関心と当事者意識の無さであった。教壇に立つことを目指す身でありながら、沖縄の米軍基地問題にも特定秘密保護法にも無関心であった自分自身に、多くの学生が気づいたのである。同じことを

教師が授業をしても、学生の受けとめ方は異なる。与えられたものとして受けとめるのである。同級生が提起するからこそ、自分の不甲斐なさに気づく。学生たちの協同の学びの重要性がここにある。

当事者意識や主体性が必要なのは、なにも教師を目指す学生だけではない。

サッカーワールドカップの日本代表監督を務めた岡田武史氏は、「選手が生き生きと自分からプレイするためには、選手が『よし、やってやろう』と思わなければいけないんです」（長田 2009：50）と言う。スポーツライター・武田薫氏は朝日新聞の『耕論』で、日本陸上競技連盟・中長距離マラソン部長宗猛氏の「川内君⁽²⁾こそプロで、実業団の選手は実質的にはアマ」という発言を引用し、実業団の選手は駅伝チームの一員に埋没したままでは、「世界に通用する」選手に育たないと述べている⁽³⁾。

スポーツ界で選手が育つためにその主体性が重要であるように、教育にとっても、学習者の主体性を育むことが重要である。学習者が「よし、やってやろう」と思わなければ、生き生きと学ぶことに繋がらない。しかし、現実には、授業料を払って授業に出席する権利を得たにも関わらず、その権利は学生によって簡単に放棄される。学習の成果であるはずの単位取得は、それ自体が目的のように扱われ、教員は指導に乗らない学生を脅す最後のカードとして単位認定を振りかざす。果たしてそのような中で、主体性を育む教育は実現するのだろうか。

教育における自由と民主的な統治という二つの基本原則の下に運営されるサドベリー・バレー・スクールの創立メンバーであるダニエル・グリーンバーグ氏は、教育の中に二つの教育観が混在するという。「自然が、あらゆる生物種のあらゆる個体に対し、それが有効な成体になるのに必要な道具を与えている」〈自然な子どもの成長〉という教育観と、「大人たちが子どもの学ばせたいと決めた、特定の知識にかかわる」〈教授〉という教育観である（グリーンバーグ 2006：4-5）。〈教授〉は「子どもが学びたいと思うものと、ほとんど関係しない」とグリーンバーグは断定する。〈教授〉が子どもの主体性と相容れないとすれば、大学に至るまでの教育で、ほとんど主体性を育てられてきていないことになる。

大学の教員として建築を教えていた辻正矩氏は、学生の卒業証書だけを目的とした学習意欲のなさにうんざりしていた。しかしそれは、「彼らにだけ責任があるのではなく、一斉授業で画一的な教育を受け、受け身の学習を強いられてきた高校以下の学校教育のやり方に根本的な問題がある」（辻ら 2013：96）と考えるようになる。賛同者を得る中で、子どもの主体性や自立性を育てる学校として、フレネ教育を取り入れた箕面こどもの森学園を設立する。

経済開発機構（OECD）の 2012 年学習到達度調査（PISA）でフィンランドは、数学的リテラシーで 6 位（09 年度）から 12 位、読解力は 3 位から 6 位、科学リテラシーでは 2 位から 5 位に順位を下げた。朝日新聞のインタビューに応じた国家教育委員会委員長のピトゥカラ氏は学力低下の対策として「一番大事なのは、『先生が教える』から、『生徒が学ぶ』という文化に変えることだ」と述べている⁽⁴⁾。

教職を目指す学生の自主活動としての沖縄研修

学生が意欲をもって学ぶ場を、大学はどのように提供できるだろうか。その一例を以下に紹介する。

立命館大学の教職を目指す者を対象にした沖縄研修は、2011 年に大学の教育力強化予算を得て、教員側からの働きかけで始まった。教職を目指す学生に多様な視点と大きな視野を養って欲しいという願いから、「多様性体感」をキーワードとし、学年を超え、学部や学科だけでなくキャンパスを超えた活動として 30 名をめどに募集を開始した。参加者は、グループをつくり、自ら研修計画を立て、行動する。必ず現地の人との交流を計画することが条件である。宿舎として那覇市にある環境教育施設「森の家みんな」に受け入れていただき、そこで環境教育を受講するだけでなく、大部屋で寝泊まりし、自炊もする。参加対象者は、教職への意思がはっきりしてくる 2 回生以上となっている。

実行委員は、参加者の中から立候補によって選ばれる。そのあとは、学生の実行委員会を中心に進む。初年度はすべてが手探りだったが、びわこ・くさつキャンパスの 4 回生の、「教職という同じ志を持つものが学年やキャンパスを超えて繋がりたい」という意欲に支えられていた。1 日目は、午後に現地集合し、観光バスを借りてひめゆり平和祈念資料館を訪れ、夜は宿舎でひめゆり学徒隊の一員だった宮城喜美子さんの講話を聴いた。学生たちの熱心な質問に時間を超過して話して下さった。2 日目夜と 3 日目午前には森の家みんなでの環境学習、2 日目午前・午後と 3 日目午後はグループ研修、4 日目はそれぞれが学んだことを分かち合って、正午ごろ現地解散となった。

表 1 に、2 年目の 2012 年度の「沖縄研修概要」を示す。この年の参加は 4 回生 7 名、3 回生 6 名、

沖縄研修概要		
1. 事前学習会日程と内容		
2012 年 11 月 25 日	第一回事前学習会	13:00～16:00 平井美津子先生(吹田市中学校教諭)による講演 班分け発表
12 月 15 日	第二回事前学習会	13:00～16:00 4 回生による沖縄についての学習 各班による班の進行状況報告 実行委員から全体行動予定の発表
2013 年 2 月 3 日	第三回事前学習会	13:00～16:00 各班による班の活動予定発表 研修前の思い・意見交流 研修に向けての注意・確認
2. 研修行程と内容		
2013 年 2 月 12 日～15 日		
2 月 12 日	10:00 那覇空港集合	
	11:20～12:30 ひめゆり平和祈念資料館見学	
	12:40～13:20 昼食	
	14:00～15:40 沖縄県平和祈念資料館で、大城藤六さん(ともの会)の講演	
	16:30～17:20 アプテラガマ見学	
	18:30～19:10 森の家みんな チェックイン・夕食	
	19:20～ 館内利用についての説明	
	20:00～ 感想シェア	
	入浴	
	22:00 消灯	
2 月 13 日	7:15～8:00 朝食・片づけ	
	8:00～9:00 班活動出発	
	～18:00 班活動	
	18:00～19:00 夕食	
	19:00～21:00 環境学習(森の家みんなの藤井晴彦さんによる環境学習 座学と森での生物観察)	
	21:00～ 入浴	
	22:00 消灯	
2 月 14 日	7:00～8:00 朝食・片づけ	
	8:00～11:00 環境学習(藤井晴彦さんとゲーム・ディスカッションによる環境学習・森での生物観察)	
	11:30～17:00 班活動	
	17:00 みんな帰宅・交流会準備	
	18:00～22:00 交流会(沖縄国際大学創作エイサーサークル 鼓舞楽団清風によるエイサー・各班の班活動でお世話になった方々を招き、班の枠を超えた交流・宮古島出身の歌手、下地勇さんによるライブ)	
	22:00～ 入浴	
	23:00 消灯	
2 月 15 日	7:15～8:00 朝食・片づけ	
	8:00～9:00 掃除・荷物整理	
	9:00～11:15 解散式	
	11:30 解散	
3. 事後学習会日程と内容		
2013 年 2 月 27 日	事後学習会	13:00～17:00 各班の活動報告

表 1 『立命館大学教職沖縄研修 2012』より 沖縄研修概要

2 回生 13 名，科目等履修生 1 名，修士 1 年生 1 名の計 28 名，教員 2 名が付き添った。1 年目の参加者から有志を募り，その学生たちが募集，新実行委員会の立ち上げを担い，新しい実行委員をサポートした。3 年目の 2013 年度以後は，教員側が口出しする間もなく，活動が継続されている。顧問のような立場で何人かの教員が実行委員会に出席したり，事前研修の会場の鍵の管理を請け負ったりしてはいるものの，実質的に学生の自主活動として定着してきている。

応募の際に，沖縄研修への参加の動機や，沖縄でどのような研修をしたいのかをレポートすることになっている。しかし，実際は「沖縄」という何となく魅力的な響きの土地へ他の人と楽しく旅行することだけを思い描いて応募してくる学生もかなり存在する。そんな彼らも，事前学習とグループで集まっでの計画づくりの中で，徐々に変化していく。

全容をふりかえるのは別の機会に譲るとして，グループ活動を中心に学生の学びを捉えてみたい。グループ活動は以下の 6 つだった。学生たちのふりかえりのことばは，報告集「教職沖縄研修 2012」より引用している。

「米軍基地」グループ

このグループは，普天間基地を中心に，佐喜真美術館や宜野湾市博物館の職員や基地周辺の方々へのインタビュー，沖縄国際大学の学生との交流などを実施した。そのメンバーのひとり，実行委員の中で唯一の男性だった 2 回生の S は「参加の動機は沖縄へ行きたかった。沖縄から見た本州と本州から見た沖縄のずれを感じた。それが一番自分の中で変わったもの（経済学部 2 回生⁵⁾）」と述べている。自分の視野がいかに狭かったかということに気づくので

ある。これは 3 回生の M にも言える。「基地についていろいろ知って混乱している。簡単なものではない。でも，自分の中で咀嚼していきたい（文学部 3 回生，2014 年度教員採用試験中学社会科合格）」。

この二人は，次の年の実行員会の立ち上げに関わっている。

「環境」グループ

「環境」グループは，沖縄大学の盛口満准教授のガイドで，盛口ゼミの学生と共にヤンバルに案内してもらった幸運を得た。

実行委員のひとりでもある Y は「沖縄の自然がなくなってきたことを体で感じてきた。森の中は，苦手だが，時間がたつにつれて熱中していた。自分は高いところが苦手なのを忘れていた。ひとりではなく，みんなで話すことの良さ，楽しさ。いろいろなことを共有できたのが大学生活で初めて。すごい経験になった（法学部 2 回生）」，大学院生の J は「環境に関してもいろいろあったが，自分の中では『ちっちゃなサドベリースクール』に入った感じ。『自分でする』ということを経験につなげればと思う。沖縄の人は人との付き合い方が上手。それも学べた。環境以外でも学んだことが多かった（理工学部修士 1 年）」と述べており，沖縄大学の学生と行動を共にすることで，学習がさらに魅力的なものになったのである。

「文化」グループ

「文化」グループは計画がなかなか具体的にならなかった。一日は沖縄県元中学校の先生と首里城や古民家を巡り，午後はキリスト教学院大学の ONE LOVE という団体を招き，児童労働について考える学習をした。夜の交流会の料理を担当することとな

ったため、もう一日はボランティアで来てくださった沖縄のお母さんたちと市場に出かけ、教えてもらいながら宿舎で沖縄料理をつくった。「最初予測していたことと違うことになった。三線とかガラス細工とか、そんなことは一人で観光してもできる。現地のお母さんとか、元先生と行動をともにすることは観光ではできないので、予想を裏切ったことがよかった。沖縄の人と人のつながりの多さにびっくり。人のつながりが温かい。そういう雰囲気が出せる人になりたい（理工学部 2 回生）」。

「歴史」グループ

このグループは、琉球大学教育学部の学生と一緒に、海軍指令壕、首里城など歴史的な施設を巡った。他は 2 回生の中で一人 3 回生だった U がグループを引っ張り、「琉大生と二日間。本土の見方が変わった。広島出身の琉大生の話、『離れてみて分かるようになることが多い』。日本の自分勝手な面。社会の教員になることもあって、普天間、原発ふくめて調べて今後につなげたい。これからは琉球大学の人と飲みに行ったり、つながりを濃くしたい（経済学部 3 回生、2014 年教員採用試験中学社会科合格）」と、成果を実感していた。しかし、2 回生の K には「悔しいという思いが強い。事前研修から不安がたくさんあった。それを誰にも話せなくて、耐えきれなくて、I さんと M の前で泣いてしまった。もっと前からお互い知ろうと思えたら知れたのに、自分に閉じこもって前に出れていなかった。（中略）もっといろいろな人と話せばよかった。後悔。でも、今そう思える自分が幸せ。自分から一歩踏み出す勇気が大切だと思った（経営学部 2 回生）」と、主体的になれないまま参加した後悔があった。他の 2 回生も計画を 3 回生に頼ってしまい、「どこへ行くか」

を決めはしたが、「何のために」ということを自分の中で醸成できていなかった。しかし、この悔しさが次年度の再挑戦に繋がっていった。

「サドベリースクール」グループ

このグループは、沖縄サドベリースクールを訪問した。スクールとスムーズに連絡がとれず、不安を抱えての訪問だったが、予想以上の刺激を受けた。グループ活動の 2 日目は、子どもたちやスタッフの了解を得て、一緒にお好み焼きをつくって楽しんだ。「行くまでに先方と十分詰められなかったが、子どもたちが積極的に関わってくれた。子どもが主体で動いていた。もっと知りたいと思った。子どもたちの内側の部分、子どもに寄り添うことも大事だけれど、あえて見ないことも大切。軽い気持ちで参加したが、これからの原動力、大きなきっかけになった（産業社会学部 2 回生）」。

H は、企画への関わりへの遅れから、希望してこのグループに入ったのではなく、実行委員会からのグループに配置された。「最初に行くのも申し訳ないような消極的な姿勢だった。サドベリーの二人のスタッフの、他の人への受け入れが良かった。子どもと手をつないで遊ぶぐらい親しくなった。子どもたちの反応をゆっくり待ってあげる。自分たちでルールをつくり、子どもたち自身がそれを守っている。来年の 4 月から教師になるので取り入れていきたい。同時に、子どもたちの反応を待つのは、大変。つい、『だいじょうぶ』とか声をかけてしまう。サドベリーは、空間に一緒にいるだけという姿勢。教師はずっと勉強し、成長していくものだと感じた（理工学部 4 回生、現小学校教諭）」。

「珊瑚舎スコーレ」グループ

珊瑚舎スコーレを訪問した学生は、昼間の生徒との作業や食事づくり、夜間中学校での交流を通して、スタッフや生徒から大きな刺激を受けた。「参加のきっかけは、試験⁶⁾に受かって何をしたらよいのか分からなくなった。なぜ教師になるのか、面接対策はしてきたが、自分の本音とは違う感じ。去年参加した人が『自分の人生変わった』と言っていたので、4月からの不安をなくせたらと思った。珊瑚舎スコーレについて勉強し始めたら、とても魅力のある学校なので、珊瑚舎スコーレへ行ったら、公立の教師を辞めたくなるのではと思っていた。実際行ってみて、全部を通して、いろいろなことの根本が分かった感じ。これまでは、勉強の外に目的を求めていることが分かった。逃げていた。学びの中に目的を持つことの大切さ。珊瑚舎では楽しい授業をしていた。これはまねできない。やりたい理科教育のイメージがまるっきり変わった。もともとと思っていた、抑え込んでいたものが、考えなおせてよかった。やっと4月からのスタートラインに立てる。本音のコアなところを思い出せた。4月から教壇立つのが楽しみ。次のステップが分かった（生命科学部4回生、現中学校理科教諭）。

学生は何を学んだのか—主体性と体験という当事者性

この研修で「学び方を学んだ」という声をしばしば聞く。取り組むテーマを決め、情報を集め、話しあう。研修先や学習に関わってほしい人と連絡を取り、交渉し、スケジュールを決め、実際に取り組む。学習したことを他のメンバーに向けて発表し、討論し、成果をまとめ、次の目標を決めていく。

また、その過程が、自分の生き方を深く検討する

機会になる。この研修に参加したことによって、人生の上での大きな決断をしたIは次のように述べている。「去年の珊瑚舎や、ここでの生活で得たものがすごく大きい。横のつながりから縦のつながりへ。そのつながりですごく成長できた。自分とみんなに期待し、どう関わるかを考えながら参加した。去年ほっしー（珊瑚舎の校長）に、『自分の時計を大切に』と言われ、本来の夢の体育教師を目指す決心ができた（経済学部4回生）」。二度目の参加だったこの学生は、卒業後別の大学に通い、本来の希望だった体育教師を目指している。

参加の動機もあいまいで、事前学習への関わりの薄さから実行委員から「やる気があるのか」と問いただされる場面もあった4回生のTは、他の人たちのふりかえりのことばに感動の涙を見せながら語った。「研修に来る前には軽い気持ちだったこともありましたが、自分の意見があまり言えずに、心を閉ざしていた。それを後悔している（経営学部4回生）」。珊瑚舎スコーレのグループにいた彼は、同じグループのメンバーの意識の高さについていけず、劣等感に悩んだ。それをメンバーの一人に話したことがきっかけで、他のメンバーや教員に自分の気持ちを話し、相談したと語ってくれた。そして「自分は何も出来なかったけれど、これからもみんなと繋がっていきたい」と言葉を結んだ。今は、教職を目指す意志を固め、自主ゼミに参加しながら教員免許状取得に取り組んでいる。

しかし、最も多くを学んだのは実行委員のメンバーである。

実行委員も初めは軽い気持ちで応募してきた。しかし、何かしら「自分を変えたい」という思いから実行委員に立候補した。「この研修をきっかけに変わりたいと思った。学ぶ姿勢をいろいろなところで

見て、すごく変わるきっかけになった。自分の考えを言いたいと思えるようになった。自分の考えを受けとめてくれると思えた。毎回事前研修で『自分がこうしたらよかった』と反省していて。ここに関われたこと、ここにいる人に感謝している（産業社会学部 2 回生）。

実行委員は 2 回生が中心となるが、4 回生以上の年長者も加わり、重要な役割を果たしている。「研修は絶対行きたいと思っていた。実行委員をやり出したら、2 回生ばかりで居場所を感じられず、自分が誰よりも怒っていたし、嫌われると思っていたし、怖くて……。でも言うべき立場なのかと。人のことを考えながら自分が言うべきことを選択したのは初めてだった。実行委員は、しんどく、沖縄へ行きたくないと思ったり、ふがいないと思ったり。2 回生が自分たちでやろうとしてる姿勢を見せてくれた時、実行員をやってよかったと思えた。沖縄へ来て、涙もろくなった。沖縄の力と、そこへきた 30 人の何かに向かう力が、良い感じにかみあっている気がした（科目等履修生、現中学校社会科教諭）。

こういった実行委員たちを前年度の参加者が支える。「昨年の経験から最初の立ち上げは手伝わせてもらおうと思っていたが、沖縄へ行く気はなかった。F が実行委員長になったとき、『大丈夫かい！』これは行かねばと思った。S は最初ひとりでアボをとれなかった。F と S の成長を感じた。この人たちがすごく成長して、すごく満足（経済学部 4 回生、現中学校社会科教諭）。

実行委員長だった F は、委員長としての自分の力量の無さに悩んだ。「何回、途中で『来たくない』と思ったことか。周りの人はしっかりしている。『あの人に任したら上手くいったのに』と何回思ったことか。『なぜ実行委員長なんかに立候補したの

だろう』と。事前学習に来た人の顔を見て、次まで頑張ろうと思え、ここまで来た。みんなにありがとう（理工学部 2 回生）。

学生たちは、沖縄研修に主体的に関わることで、沖縄について学ぶだけでなく、他者と様々な経験を共有し、学び、自分の成長を自覚したのである。

沖縄研修の初年度の参加者でもあり、現在、暮らし応援ネットワーク「よりそいホットライン」で活動する日野貴博氏は、大学にゲスト・スピーカーに招かれ、その準備をする中で Facebook に次のような所感を述べている。

「人の学びは基本的には体験→知識の順が効率が良いため、現状の高校→大学の進学システムは機能的でない。偏差値振り分けにせよ『なんとなく』にせよ、入ってみなければ当たり／外れは分からない。学費を考えると負のリスクが高すぎる。しかも様子を見てみると、『外れ』と感じている学生の方が圧倒的に多い。それもそのはず。だって『授業、何言ってるか分からない／生活に結びつかない』んだもん。そういう意味で、学生の目が学外（バイト・サークル・ボランティア・ギャングル）に向く、自分探しの旅に出るのは自然な流れか。問われるのは主体性。中等教育の間抑圧されることの多いこれを、突然求められる。なんとかかわしても、就活の壁で再度問われる。」

誰が、その「主体性と体験」を補うのか。彼は教育と教師に次のような期待をかける。

「教育段階であれば、主体性と体験活動を通した学びを尊重し、作っていくことだろう。むしろその場も作っていないのに、『早く先のこと決めて

ね』『とりあえず勉強してね』は、あまりに自助論すぎる。悩む生徒を見て、『ダメなやつだ』と思うくらいなら、まず自分の力と自覚のなさに気づいてほしい。せめて、『一緒に考えていこっか』という姿勢と体制はほしいところ。」

そして、この文を次のような言葉で締めくくっている。

「少なくとも高等教育における講義を行う予定のものとしては（あるいは大学生たちと関わる身としては）、主体性と体験という当事者性はキーになるだろうなと感じている。」⁽⁸⁾

沖縄研修で教員の果たした役割は、機会を提供することと、活動を見守るなかで必要なアドバイスをすること、すなわち学習環境を整えることだった。学生たちが学習した「学び方を学ぶ」ことは、本来中等教育までに修得されなければならないことかもしれない。しかし、主体的に学ぶ機会を奪われてきた彼らに「主体性と体験」により学習の当事者性を取り戻すことは、大学の教育改革の要のひとつと考える必要があるのだろう。

注

(1) 立命館大学の教職課程の、3回生で受講する通年の必修科目である。

(2) 公務員ランナーの川内優輝氏のこと。

(3) 武田薫「(耕論) 駅伝というガラパゴス——美談は世界に通用しない」朝日新聞（朝日新聞デジタル2013年12月14日）より。

(4) 石山英明「「教える」ではなく「学ぶ」に—国際調査で順位低下フィンランドの対策は？」朝日新聞

（朝日新聞デジタル2013年12月19日）より。

(5) 学年（回生）はすべて当時のものである。

(6) 教員採用試験のこと。

(7) 学習支援ボランティア団体 Atlas 代表（<http://atlas-sums.jimdo.com/>）。第1回沖縄研修に経済学部4回生として参加していた。

(8) 引用した文は <https://www.facebook.com/takahiro.hino.507> 2013.12.10 に掲載。

引用文献

長田弘（2009）『問う力』みすず書房

ダニエル・グリーンバーグ（2006）『世界一素敵な学校—サドベリー・バレー物語』緑風出版

辻正矩・藤田美保・守安あゆみ・中尾有里（2013）

『こんな学校あったらいいな—小さな学校の大きな挑戦』築地書房

藤満慧子（2013）『立命館大学教職沖縄研修 2012』2012年度沖縄研修実行委員会

武田 富美子（立命館大学生命科学部）